



矩形断面曲がり管内層流

著者	久保 忠延
雑誌名	長野県短期大学紀要
巻	43
ページ	1-8
発行年	1988-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1118/00000558/



矩形断面曲り管内層流

久保忠延

1 緒 言

曲り管は直管と同様重要な管路要素であり,そ の流れに関する研究は極めて多い⁽¹⁾。管断面形状 としては円形のものが最もポピュラーであり,円 管に関してはいろいろな条件下での流れが実験的 に知られ,また理論的に求められている。

断面形状が矩形の管は円管に次いで広く用いら れており、その流れには多くの関心が寄せられて いる。矩形断面曲り管の流れを解析した初期のも のとしては伊藤⁽²⁾⁽³⁾, Eichenberger⁽⁴⁾, Cuming⁽⁵⁾などがあり、矩形管内に生じる二次流れの状 態などが求められている。その後 Cheng⁽⁶⁾⁽⁷⁾, Ghia⁽⁸⁾らにより更に詳細に流れの解析がなされ た。しかしこれらはいずれも管軸の曲率が一定の 場合について研究されたものであり、管軸の曲率 が変化する場合の矩形断面曲り管の流れを取り扱 ったものは見当らない。

本研究は曲管の曲率が変化する例として管軸が 双曲線で表され,その曲率が比較的小さい場合の 矩形管内層流について解析したものである。

2 座標系および基礎式

図1に座標系を示す。管軸を含む平面に x, y 座標をとり、これと直交する方向に z 軸をとる。管 軸に沿う座標を x_1 とし、管軸に直交する面内に図 2のようにX, Y座標をとり (X, Y, x_1) がこの順 に右手系をなすようにする。

管軸を表す曲線を $y_1 = c(1 + \kappa^2 x_1^2)^{1/2}$ とする。 ただし $\kappa = m/c$ である。

このとき管軸の曲率 k. は

 $k_c = c\kappa^2/(1 + \kappa^2 x_1^2 + c^2 \kappa^4 x_1^2)^{3/2}$

$$(x, y, z)座標と(X, Y, x_1)座標との関係はx=x_1-Xc\kappa^2x_1(1+\kappa^2x_1+c^2\kappa^4x_1^2)^{-1/2}y=c(1+\kappa^2x_1^2)^{1/2}+X(1+\kappa^2x_1^2)^{1/2}×(1+\kappa^2x_1^2+c^2\kappa^4x_1^2)^{-1/2}$$

z = Y

X, Y, x_1 は直交しているので計量テンソルは $g^{ij}=g_{ij}=0$ ($i \approx j$), $g^{ij}=1/g_{ij}(i=j)$; (i, j=1, 2, 3)である。

いま考えている管の場合には

$$g_{11} = g_{22} = 1$$

$$g_{88} = \{1 - c\kappa^2 X (1 + \kappa^2 x_1^2 + c^2 \kappa^4 x_1^2)^{-8/2}\}^2 \times \{1 + c^2 \kappa^4 x_1^2 (1 + \kappa^2 x_1^2)^{-1}\}$$

となる。

速度の X, Y, x_1 方向成分をそれぞれ u, v, w とし, $g = \sqrt{g_{88}}$ と置くと連続の式および運動方程式 は次式となる。



ï

長野県短期大学紀要 第43号(1988)

$$\begin{aligned} \frac{\partial u}{\partial X} + \frac{\partial v}{\partial Y} + \frac{\partial}{\partial x_{1}} \left(\frac{w}{g} \right) + \Gamma_{13}^{3} u + \Gamma_{83}^{3} \left(\frac{w}{g} \right) &= 0 \qquad (1) \\ u \frac{\partial u}{\partial X} + v \frac{\partial u}{\partial Y} + \frac{w}{g} \left(\frac{\partial u}{\partial x_{1}} + \Gamma_{83}^{1} \frac{w}{g} \right) &= -\frac{1}{\rho} \quad \frac{\partial p}{\partial X} + v \left\{ \frac{\partial^{2} u}{\partial X^{2}} + \frac{\partial^{2} u}{\partial Y^{2}} + \frac{1}{g^{2}} \quad \frac{\partial^{2} u}{\partial x_{1}^{2}} + \frac{1}{g^{3}} \quad \frac{\partial}{\partial x_{1}} \left(\Gamma_{83}^{1} \right) \\ &+ 2\Gamma_{38}^{1} \frac{\partial}{\partial x_{1}} \left(\frac{w}{g} \right) \right\} \qquad (2) \\ u \frac{\partial v}{\partial X} + v \frac{\partial v}{\partial Y} + \frac{w}{g} \quad \frac{\partial v}{\partial x_{1}} &= -\frac{1}{\rho} \quad \frac{\partial p}{\partial Y} + v \left\{ \frac{\partial^{2} v}{\partial X^{2}} + \frac{\partial^{2} v}{\partial Y^{2}} + \frac{1}{g^{2}} \left(\frac{\partial^{2} v}{\partial x_{1}^{2}} - \Gamma_{83}^{1} \frac{\partial v}{\partial X} \right) \right\} \qquad (3) \\ \frac{\partial}{\partial X} \left(\frac{w}{g} \right) + \Gamma_{81}^{8} \frac{w}{g} + \frac{\partial}{\partial Y} \left(\frac{w}{g} \right) + \frac{\partial}{\partial x_{1}} \left(\frac{w}{g} \right) + \Gamma_{18}^{8} u + \Gamma_{83}^{8} \frac{w}{g} &= -\frac{1}{\rho} \quad \frac{1}{g^{2}} \quad \frac{\partial p}{\partial x_{1}} + v \left(\frac{\partial^{2} (w)}{\partial X^{2}} \right) \\ &+ \frac{\partial}{\partial X} \left(\Gamma_{81}^{8} \frac{w}{g} \right) + \Gamma_{81}^{8} \frac{w}{g} + \frac{\partial^{2}}{\partial Y^{2}} \left(\frac{w}{g} \right) + \frac{1}{g^{2}} \left\{ \frac{\partial^{2} (w)}{\partial x_{1}^{2}} \right\} + \frac{\partial}{\partial x_{1}} \left(\Gamma_{18}^{3} u \right) \\ &+ \Gamma_{18}^{8} \frac{\partial u}{\partial x_{1}} - \Gamma_{83}^{1} \frac{\partial w}{\partial X} \right\} \right] \qquad (4) \end{aligned}$$

ここで Γ_{jk}^{i} はクリストフェルの第2種記号で,いまの場合

$$\Gamma_{88}{}^{1} = -\frac{1}{2} - \frac{\partial g_{38}}{\partial X}, \quad \Gamma_{18}{}^{8} = -\frac{1}{2} - g^{88} - \frac{\partial g_{38}}{\partial X}, \quad \Gamma_{88}{}^{8} = -\frac{1}{2} - g^{88} - \frac{\partial g_{88}}{\partial x_{1}}$$

である。

また, ρ は流体の密度, ν は動粘性係数, ρ は静圧を示す。

3 計算手順

$$\begin{aligned} \vec{x}(1) &\sim (4) \delta \ \kappa \ll 1 \ \partial (b c \overline{c} \partial b \ \delta \ \delta \ \partial (b - a \ \partial (b - a \ \delta b \ \partial (b - a \ \partial (b \ \partial (b - a \ \partial (b \ \partial (b - a \ \partial (b \ \partial (b - a \ \partial (b \ \partial (b$$

式(5)~(8)は κ を摂動パラメータとするとつぎのように展開できる。

$$\begin{array}{cccc} u = & \kappa^{2}u_{2} + \cdots \\ v = & \kappa^{2}v_{2} + \cdots \\ w = w_{0} + \kappa^{2}w_{2} + \cdots \\ p = p_{0} + & \kappa^{2}p_{2} + \cdots \end{array} \end{array} \right)$$
(9)

ҝ⁰のオーダの式は

この解はポアズイユ流れで

ただし $l = \frac{2n+1}{2b}\pi$

管中心における最大速度 W。は

以下速度を W_0 , 長さを b, 圧力を ρW_0^2 で無次元化し、それらを改めて同じ記号で表すことにする。 レイノルズ数を $R_e = Wb/\nu$ で定義し、管断面のアスペクト比を k = a/b とおくと無次元 化 し た w_0 はつぎのようになる。

$$w_{0} = \frac{\frac{1}{2}(1-X^{2})-2\sum_{n=0}^{\infty}(-1)^{n} - \frac{1}{l^{8}} - \frac{\cos lX \cosh lY}{\cosh lk}}{\frac{1}{2}-2\sum_{n=0}^{\infty}(-1)^{n} - \frac{1}{l^{8}} - \frac{1}{\cosh lk}}$$
(13)

また圧力勾配は

$$\frac{dp_0}{dx_1} = -\frac{1}{R_s} \frac{1}{\frac{1}{2} - 2\sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n \frac{1}{l^3} \frac{1}{\cosh lk}}$$
(14)

つぎに κ^2 オーダの解は変数分離形で求められることがわかり,

$$u_{2} = \hat{u}_{2} \frac{c}{(1 + \kappa^{2} x_{1}^{2})^{3/2}}, \quad v_{2} = \hat{v}_{2} \frac{c}{(1 + \kappa^{2} x_{1}^{2})^{3/2}}$$

$$u_{2} = \hat{v}_{2} \frac{c}{(1 + \kappa^{2} x_{1}^{2})^{3/2}}, \quad p_{2} = \hat{p}_{2} \frac{c}{(1 + \kappa^{2} x_{1}^{2})^{3/2}}$$

$$(15)$$

とおくと ҝ² オーダの連続の式および運動方程式は

$$\frac{\partial \hat{u}_2}{\partial X} + \frac{\partial \hat{v}_2}{\partial Y} = 0 \qquad (16)$$

$$w_0^2 = -\frac{\partial \hat{v}_2}{\partial X} + \frac{1}{R_e} \left(\frac{\partial^2 \hat{u}_2}{\partial X^2} + \frac{\partial^2 \hat{u}_2}{\partial Y^2} \right) \qquad (17)$$

$$0 = -\frac{\partial \hat{v}_2}{\partial Y} + \frac{1}{R_e} \left(\frac{\partial^2 \hat{v}_2}{\partial X^2} + \frac{\partial^2 \hat{v}_2}{\partial Y^2} \right) \qquad (18)$$

式(17), (18)より
$$p_2$$
 を消去すると

$$\frac{\partial w_0}{\partial Y} = -\frac{1}{R_e} \left(\frac{\partial^2 \omega}{\partial X^2} + \frac{\partial^2 \omega}{\partial Y^2} \right) \dots (20)$$
ただし $\omega = -\frac{\partial d_2}{\partial Y} + \frac{\partial \hat{v}_2}{\partial X} \dots (21)$
流れ関数 Ψ を用い
 $d_2 = \frac{\partial \Psi}{\partial Y}, \quad \hat{v}_2 = -\frac{\partial \Psi}{\partial X} \dots (22)$
とする。式(22)を(21)に代入すると
 $\frac{\partial^2 \Psi}{\partial X^2} + \frac{\partial^2 \Psi}{\partial Y^2} = -\omega \dots (23)$

式(20), (23)から数値計算によりうず度 ω, 流れ 関数 Ψ を求める。求めた Ψ の値を用い(22)式 から二次流れを計算する。また, 軸方向速度のポ アズイュ流れからの偏差 ω₂ は式(19)より計算す る。

4 計算結果と考察

図3に計算結果にもとづいて描いた二次流れ流 線を示す。図(a),(b),(c)はそれぞれアスペク ト比が2,1,0.5の場合であり,流れは管軸を 含む平面に対して対称であるので,図は対称面 (たとえば図3(a)のABで示される面)の上半分













短形断面曲り管内層流











図6 ŵ2 の等速度線図(アスペクト比 0.5)

についてのみ描いて示してある。また図の右側が 曲りの外側(管内部から見て凹側),左側が内側 (凸側)になるように描いている。流れの向きは図 (a)に矢印を付して示したが,図(b),(c)につい ても同様であるので矢印は省略した。流線は流れ 関数の最大値と最小値の差を10等分して描いてい る。流線間の流れ関数の値の差をDで表し,おの おのの図の右上に示した。図はいずれも管軸の曲 率最大の位置(*xx*1=0)におけるものである。図 3はレイノルズ数 *R*.が1の場合であるが,異る レイノルズ数の場合にもほぼ同様な二次流れ流線 が描かれた。これらの図はいずれもこれまで良く 知られた曲管内の二次流れのものと同様なもので ある。

図4~図6に管軸方向速度のポアズイュ流れか らの偏差 \hat{w}_2 の等速度線図を描いたものを示した (断面位置は $\kappa x_1 = 0$)。図中実線で描かれた部分 は w_2 が正,破線部分は負の値である。図にDで 表された値は等速度線の間隔の値である。

長野県短期大学紀要 第43号(1988)



図7 管軸方向各断面における流れ状態(Re=1.0)

図4はアスペクト比1の管において管内二次流 れのフローパターンが R. とともにどのように変 化するかを示したものである。R.の小さな場合 の図(a)では管断面に左右ほぼ対称に増速または 減速された領域が現れている。R.が少し大きくな った図(b)では管中心近辺で等速度線に変曲点の 存在する曲線が現れ始めている。図(b)よりわず かR。の大きい場合の図(c)では管のコーナー近辺 と管の中心近辺でそれぞれ ŵ2 の符号の異る流れ 領域が一対づつ存在している。図(c)よりわずか R_e が増加すると図(d)のよう kR_e の小さな流れ のときのフローパターンの名残りである曲りの内 側で増速、外側で減速されている部分が管のコー ナーにわずか存在している。更に R. の大きくな った場合の図(e)では流れの増速減速部分が図(a) の場合と逆になっている。

図4(a)~(e)から R. の小さいとき軸流速度は 曲りの内側で大きく,流れは短い経路を通って流 れようとしているのに対し, R. が大きくなる と 流体に働く遠心力の効果で軸流速度は曲りの外側 で大きくなってゆく。

図5,図6にアスペクト比2および0.5の場合 の w_2 の等速度線図を示した。いずれの場合も R_e の増加に伴うフローパターンの変化の様子はアス ペクト比1の場合と類似のものであるが、 R_e の 小さいときと大きいときの中間で現れる過渡的な フローパターンが生じるときの R_e の値はアスペ クト比により相違することがわかる。

図7はアスペクト比1, R_a が1の場合につい て管軸方向の数個所の断面における流れの状態を 描いたものである。図で左側の枠内には二次流れ 流線を,右側の枠内には w_2 の等速度線図を示し た。図(a)は最大曲率位置の断面より少し下流の $\kappa w_1=0.2$ における流れであるが $\kappa w_1=0$ における もの(図3(b)および図4(a)に示したもの)とほと んど差がない。断面位置がこれより順次下流に移 ってゆくと,そこでの流れは図7(b),(c),(d), (e)のように変化してゆく。図7の中で最下流の



図8 管軸方向各断面の ŵ2 分布 (Re=1)



図9 管軸方向各断面の \hat{w}_2 分布 ($R_e=25$) 図(e)ではポアズイュ流れからの偏差がだい ぶ 小 さくなっていることがわかる。このような管軸方 向に沿って変化してゆく流れ状態は $R_e=25,100$ の場合にも、またアスペクト比が2および 0.5 の 場合にもほぼ同程度であることがわかった。

図 8 ~10にアスペクト比が1 の場合について管 軸方向のいくつかの断面における \hat{w}_2 の大きさの 分布を描いた図を示した。図中 H で示した値は 対称面と管上部壁面との間を10等分したときの対 称面からの分点を表しており、H=0は対称面上、 H=5/10は中間点を表している。

図8は $R_s=1$ の場合について $\kappa x_1=0$, 0.4,

長野県短期大学紀要 第43号 (1988)



図10 管軸方向各断面の \hat{w}_2 分布 (R_e =100) 0.8, 1.2, 1.6, 2.0の断面上で H= 0 および H= 5/10 の点を通る線について \hat{w}_2 の分布を示したも のである。図9は R_e =25 の場合のもので, 図8 に比べ速度分布が複雑な変化をしている。この場 合は管中心 H= 0 の速度分布と中間点近くの H= 6/10 の速度分布は形が異ったものになっている。 図10 は R_e =100 の場合のものである が, \hat{w}_2 の 分布曲線は図8 の場合のものを反転した形になっ ている。

5 結 言

管軸に沿って曲率が変化する矩形断面の二次元 曲管内の層流を管軸の曲率が比較的小さい場合に ついて解析を行った。*R*.が小さい場合には流れ

は曲りの内側に偏って流れるが, R. が大きくなると流れは曲りの外側に偏って流れる。そしてその中間の R. の場合にはこの二つのフローパターンの一方から他方に移行してゆく中間的で複雑なフローパターンが現れる。

本研究を遂行するに当り懇切なる御指導をいた だいた大阪大学教養部稲葉武彦助教授に深く感謝 致します。また数値計算に際し有益なる助言をい ただいた大阪大学工学部梶島岳夫助手に感謝致し ます。

なお,本研究の数値計算は大阪大学大型計算機 センターを利用して行った。お世話になったセン ターの皆様に感謝致します。

文 献

- (1) 伊藤英覚:日本機械学会論文集, B50-458 2267
 (1984)
- (2) 伊藤英覚:東北大学高速力学研究所報告,4-35 96(1951)
- (3) 伊藤英覚:東北大学高速力学研究所報告,11-106 97(1955)
- (4) HANS P. EICHENBERGER : J. Math. Phys., 32 34 (1953)
- (5) H. G. CUMING : Aeron. Res. Council Rep. & Mem., No. 2880(1955)
- (6) K. C. CHENG and M. AKIYAMA : Int. J. Heat Mass Transfer, 13 471(1970)
- (7) K. C. CHENG, R. C. LIN and J. W. OU: J. Fluids Eng. Trans. ASME, Ser. I 98-1 41(1976)
- (8) K. N. GHIA and J. S. SOKHEY : J. Fluids Eng. Trans. ASME, Ser. I 99-4 640(1977)